

まくらのさうし  
枕草紙

あけぼの  
春は曙。

くも ほそ  
雲の細くたなびきたる。  
しろ やまぎは むらさき  
やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる

なつ よる  
夏は、夜。

ころ  
月の頃は、さらなり。

やみ ほたる  
闇もなほ。螢飛とびちがひたる、また、ただ一つ二つな  
ど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。あめ ふ  
雨などの降るさへ  
をかし。

あき ゆふぐれ  
秋は、夕暮。

ゆふひ は ちか からす  
夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏のねどころ  
へ行くとて、三つ四つ、二つなど飛びいそぐさへ、あはれな  
り。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、  
いとをかし。い かぜ おと むし  
日入りはてて、風の音、蟲のねなど、はたいふ  
べきにあらず。

ふゆ  
冬は、つとめて。

ゆき しも  
雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも、  
またさらでもいと寒きに、さむ ひ いそ すみ  
火など急ぎおこして、炭もてわた  
るも、いとつきつきし。ひる  
晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけ  
ば、ひおけ はい  
火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。